LOOP

一。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＬＯＯＰ

【Ｎコード】
Ｎ６６６４Ｉ

【作者名】
一。

【あらすじ】
如月一騎（きさらぎいつき）の仕事は惑星の調査と観察。しかし、落とされたのは観察対象である騎士団長の私室だった。
さまざまな出会いの中で、一騎は人々の思惑を見る。
一騎が観察者に選ばれたのはただの偶然ではない？

Ｃｈａｐｔｅｒ１．崩壊は始まりの音（前書き）

第１章は全年齢対象のただのファンタジー小説ですが、２章以降ボーイズラブを含む予定ですのでご注意下さい。

Ｃｈａｐｔｅｒ１．崩壊は始まりの音

『座標４９９－０１０８－２８７２…
転送装置にお乗り下さい』

「いつでもＯＫだぜ？ハニー」

『……。声紋から如月一騎と断定。ＩＤ認証中……ゲート開きます』

◆

「うわっ！！」

ばふっ

一騎は硬いような柔らかいような不思議な感触のするものの上に落ちた。

結構な高さから落とされたが、体はあまり痛くない。

しかし、鼻を打ったようで、痛む場所をおさえうつ伏せになった体を起こす。

「ん…？」

目の前にあった紅い瞳と目が合う。

「うわっ、なにこれ！？宝石みてぇ！」

すげぇすげぇ！と騒ぐ一騎とは対称的に、その宝石と称された紅い瞳の持ち主は微動だにしない。
かわりにバタバタと足音がこちらに近づいてくる。

「ブライト様！いかがなさいましたか！？」

白と青を基調とした隊服に身を包んだ兵士が飛び込んできた。

「貴様っ、何をしてる！？」

真っ直ぐ一騎に向かってきた兵士を止めたのは、紅い瞳の持ち主だった。

「ブライト様、今お助けを！！」

興奮状態の兵士には主の声さえ聞こえていないようで、男は剣を抜いた。
一騎はそれを避けるのをためらった。自分が退けば紅い瞳の主が斬られるのではないかと思ったからだ。

ベッドに乗り上げていた体が床に叩きつけられる。
あまりに突然の出来事に呆けていた一騎は、金属音に反応して自分が今までいた場所を仰ぎ見た。
攻撃を受け止めたのは紛れもなく兵士の主である。少しだけ鞘から抜いた細身の剣が両刃の剣を受け止めている。

「ブ、ブライト様…！？」

「いつまでそうしてる気だ？私がいるのに抜刀するとはいい度胸だな」

ふん。と鼻をならした主は少し笑っていた。

「も、申し訳ありません！！……賊にはどのような処分を？」

「謁見の手続きを」

「へ…？」

剣をしまいながら流れるように言った一言に兵士は目を丸くした。

「陛下への謁見手続き、及び客人のもてなしを」

「あの…」

「二度は言わない」

「はっ！」

兵士は敬礼をすると来たときと同じように慌ただしく出ていった。

大変なことになった。と妙に落ち着いた頭で一騎は考えた。

潜入するならもっと観察しやすい場所に落として欲しかった。森や

小さな村の近くとか。
そもそも落とすという表現はおかしくないだろうか？
座標軸を使った転送装置は地上・空中の選択も可能なはずだ。
じゃあなぜ空中に放り出されたかと考えると、やはりオペレーターだろう。
去り際のハニーという単語が相当気に入らなかったらしい。
よく思い出してみると、無機質な声の中に怒りや呆れのようなものが混じっていたような気がする。
だから仕返しの変わりに落としてやろうと思ったのだろう。

『ハニーってばやっぱ可愛いなぁ』

だが室内への転送はどうだろう？
不法侵入で一歩間違えると命が危ない。今だって命の保証があるわけではない。
少なくとも紅い瞳の主は一騎の命をどうこうするつもりはないらしい。今のところは。

「赤くなったり青くなったり忙しいな」

目の前の人物は先ほどと同じ人物だろうか？
穏和な笑みを浮かべた男は兵士との会話の時よりも幾分声が高い。
瞳が印象的で目に入っていなかったが、髪は見事な青色だった。紅い瞳とは対称的な晴天のような明るい青だ。
一騎が滅多に見れない色合いに見惚れていると男が口を開いた。

「先ほどは見苦しい物をお見せしました。部下に変わり無礼をお詫びします。そして、あなたを客人として歓迎致します」
左手を右肩に添えて礼をする姿はとても似合っていた。

◆

「リリィ～」
一騎は食堂に向かっていた。どうやら食事を出してくれるらしい。
「リリィ！」
行き交う兵士達が敬礼をしているところをみると、目の前を歩く人物は中々の位らしい。
よく見ると彼が着ている隊服は兵士のものより飾りが多い。
「リリエルー！？」
あちらこちらに兵士がいるので、一騎は少し小柄な人物を見失わないように必死についていく。
「リリエル・ブライト・ファレス第3師団長！！」
そのあまりにも大きな声に驚いて振り返ると、無精髭をはやした大

柄な男が立っていた。
その視線の先には明らかに嫌そうな顔を浮かべた紅い瞳の持ち主。
「これはこれはクラウド・ワイズ・バレン第2師団長様ではないですか」
「わざとらしい。最初っから気付いてただろ？歩くの早くなってたぞ、リリィ様」
「あんたがその呼び名を呼ぶからだろう。ブライトもしくはファレスでいいとお願いしたはずですが？」
「お願い？そんな可愛いもんじゃないだろ。あれは脅しだ。お願いっていうのはリリィちゃんの大好きな陛下にするみたいに…」
ヒュッと風が切れる音がした。クラウドの後ろの壁に刺さっていたのは小さなナイフ。
「はぁ…二人ともいい加減にして下さい」
二人の右腕を掴んでいたのは長い髪を束ねた眼鏡の男だった。
「お客様の前なのでしょう？ほら、剣から手を離して」
突然の出来事に呆然としていた一騎は我にかえった。
「すっげ～！なにあれ、カッコいい！！皆一体何もんなんスか！？さっき助けてもらった時は急すぎて頭回ってなかったけど、今思えばスゲー反射神経！！

あ、さっきはありがとうございましたッ！」

そう言って笑顔でリリエルと握手した。

「さっきまで静かだったから忘れてたけど、そういえば最初からこんなノリだった気が…」

ニコニコ笑顔の一騎とは正反対にリリエルは顔をしかめた。

「そういえば君たち、食堂に行くんだろう？」

「ていうか、なんで天下の第1師団副団長様がこんな所にいるんだ？」

素朴な疑問を投げ掛けたのは最初に現れたクラウドと呼ばれた人物だ。

「あんたこそなんでここにいるんだ。取引や話し合いは第1師団の役目だったはず」

「まぁ、そうだな…部下の様子を見に」

「あんたに会いたい物好きがいるのか疑問だが」

ふん。と毒づくリリエルに眼鏡の男はため息をついた。

「いい加減嫌いあってるフリはよしなさい」

「だれが！」

「これ以上言うなら、その口塞ぎますよ？」
うつむいたリリエルを見て男は苦笑した。
それでは、とやっと食堂に向かうことになった。

最後に現れた眼鏡の男の名前はフェンリィ・ヴァンガードと言う。
今までで分かったのは名前と第１師団の副団長ということだけだ。
一騎が、笑顔が怖いという感覚を味わった初めての人物だ。
対してクラウド・ワイズ・バレンという人物に一騎は好感を持っていた。
リリエルとのやり取りは犬猿の仲と言うよりは、兄弟喧嘩のような印象を持っていたからだ。

「観察が趣味なのですか？」
斜め前に座っているフェンリィがそう言ったのは、一騎が顔と名前を一通り再確認し終えたときだった。
「早く顔と名前を一致させようと思って！」
「文化の違う世界ですごすのは大変でしょう？たとえば…名前とか」
一騎はニコニコと擬音がつきそうなくらい笑顔で言ったが、返ってきた答えに内心ドキリとした。
「文化の違う世界…？」

「あれ？違ったのかな？でも陛下が嘘をつくわけがないし……」
彼は一騎のことを知っているような口振りで言ったが、一騎が話したのは名前だけで出身地は話していなかった。
一騎の名前を聞いただけでそう思ったのなら、違う国と言うのではないか？
違う世界というのは遠い国という意味で言ったのだろうか？

如月一騎の仕事はこの世界の調査と観察だ。
自分が異世界から来たことを秘密にして観察及び調査をしなければいけない。

一騎はふと思い出した。
この世界で一騎を排除しようとしたのは何も知らない兵士だけだ。
リリエルは一騎を客とし、陛下に会うと言った。
フェンリィの言う、陛下が異質な存在のことを感知できる能力があるというのが本当なら、団長・副団長クラスが知っているのも頷けた。
事情を知っている陛下とやらに会えば、簡単に情報が手に入るかもしれない。

「陛下という方は何でも知ってるんですね～」
「あなたのことを知ってるようでしたが……。現れた場所は予想外だったようですがね」
「それは俺もおんなじです。ひっそりとした森にでもしてくれてい

れば、こんな重役に囲まれることもなかったのに…。
いや、捕まらなかったからある意味ラッキー…？」

そこでその話題は途切れた。一騎が別の事に気をとられたのをフェンリィが気づいたからなのかもしれないが。
一騎の視線の先にはしきりに外を気にしているリリエルの姿があった。
それは食堂に着いてからずっと続いているようで、一騎は声をかけるタイミングを外したままだ。
思えばろくに自己紹介もしていない。

口を開く度に表情がコロコロと変わって掴めない。
もしかすると一番謎なのはフェンリィよりもリリエルなのでは？と一騎は考えた。

思考が止まったのを見計らってか、デザートが運ばれた。
見たこともないフルーツの盛り合わせ。
さきの食事でも肉や魚を口にしたが、何の肉を使っているか一騎は知らない。
彼はそういうことを気にするようなタイプではなかった。
食べれるのならばいい、美味しければいいのだ。
フルーツはすっぱいものから、とろけるように甘い物までさまざまだ。
すっぱいフルーツをつついていると、隣に座るクラウドが見かねて声をかけた。

「こいつはコレと一緒に食べるんだ」

コレと言うのは手に持ったグラスの中身だ。白ワインのような色をしている。
試しにフルーツを口にいれ、飲み物を含んだ。シュワっとしたかと思うと甘味が広がった。

「おっ、うまい！これすっげぇ好きかも」

ガタリ。椅子を動かす音がした。

「リリエル？」

クラウドが名を呼んだことにさして気にもせず、少し席をはずす。
と言って食堂から消えた。

◆

食事も終わり落ち着いた頃に使者が来た。
陛下の謁見手続きが完了したとのこと。
リリエルが出発間際になっても現れないことを疑問に思い、一騎は思わず尋ねた。

「あの…リリエル・ブライト・ファレス第3師団長…様は？」

陛下との謁見を決めたのはリリエルであり、一騎がついて行くことを決めたのはリリエルにだ。
騎士というのは誓いや約束というものを守る役職と一騎は思っている。

だからリリエルのことは他の騎士よりは少なからず信用している。
逆にこの短い時間の中で一番苦手になったのはフェンリィだ。
しゃべる度に本音を引き出そうとされているようで、話しをするだけでも気を張ってしまう。

「ブライト様は別の用があって先に出られました。あとから追い付くので、一騎様はフェンリィ様とクラウド様と共に陛下の元へ向かって下さいとのことです」

使者は丁寧にお辞儀をし去っていった。

「お前と行動するの嫌なんだが…」

クラウドがそう口を開いたのは、野外に出てしばらくしてからだった。
心外ですと苦笑混じりのフェンリィ。
思わず同感と言ってしまいそうになる口を一騎は必死に結ぶ。

一行は建物の外に広がる森を歩いていた。
庭園を歩き、門を抜けるとそこはすぐに森だった。
一騎はここに来た時に言った「森にでも落としてくれれば良かった」と言う言葉が、あながち間違いではなかったことに苦笑する。

「あんたと行動すると仲間内だってのに襲撃されるのはなんでだ？普通第1師団ともなれば羨む存在だろ？」

「憧れと嫉妬というのは紙一重でしょう？」
フェンリィはでも、と付け加えた。
「私はあなたと行動するの好きですよ。リリィがいればもっと面白くて好きですが」
そう言って口の端をあげる。
二人のすぐ後ろを歩く一騎はその横顔を見つめた。

師団は第５まであり、力関係は第１師団が強く、数字が増えるにつれて弱くなっている。
力関係が強い師団は陛下に近く、陛下の側近、護衛・世話係・外交などを主な仕事としている。
弱い師団は前線に赴くことが多い。かと言って知力が低く体力ばかりの者たちが多いというわけではない。
師団に入るにはそれなりの地位も必要だ。

しかし例外もあった。リリエル・ブライト・ファレスが率いる第３師団。
表向きは３番目の地位にいながら、実質は５師団の中で最下位の扱いをうけている。
彼らの大半は貴族的地位がない平民で構成されており、資格などなくとも実力を買われれば容易に入ることができる。
それを良しとしないのは貴族出身の他の４師団。
第３師団の風当たりも悪ければ、第３師団の他に対する敵対心も強い。

「一騎様？」

師団についての情報をまとめていた一騎は弾かれるように顔を上げた。

「え？あー…えっと、歩いて行くんですか？」

「第1師団の敷地まで馬車を使う」

「でももう少し道があけたところまで歩きますよ。何せ第3師団はうっそうとした森の中にありますから」

相変わらず横顔しか見えないが笑顔が絶えない。

「第3師団はごろつきが多い。恨みをかってる奴も少なくないんでな。隠れるようにしておかないといらぬ争いが増える」

クラウドがそう言ってため息を吐いた。

「それをまとめてるのがファレス師団長…。若いのに凄いですね！」

「まぁ、若い部類に入るんだろうな。もっと凄いのがいるから忘れてたけど」

「まとめてると言うか手懐けてるというか…。
頭使ってるように見えて案外力業で突き進むタイプだから師団長としてはどうなんでしょう？ある意味凄いですがね」

二人の話を聞けば聞くほど一騎はリリエルという人物がわからなくなった。
だが興味深い話は聞けた。

クラウドのいうもっと凄い人物と、フェンリィのいうリリエルの意外と男前な気質。
そういえば、と一騎はリリエルと出会った状況を思い出した。

「なるほど」

「あれに乗ります」

フェンリィが指をさした先に馬車が止まっていた。
一騎が想像したものより大きい。これならさっきの道が通れないのも頷けた。

◆

馬車はゆっくり３０分かけて目的地についた。

「うー…まだ揺れてる。もう無理。３０分が限界」

「おいおい、そんなんでまいってたら国から出れねぇーよ？」

「ふふっ、馬車初めてですか？」

「そういえば馬車って乗ったことないなぁ。歩き以外で地上を移動することって殆んどないし」

一騎は故郷の空を飛ぶ船や宙に浮く車を思い浮かべた。嵐の日でも

この馬車のよ
うに揺れることはない。
あえて恐怖心を煽るために作られた乗り物もあったが、一騎はそういった乗り物が苦手だった。
フェンリィが何か言いたげな様子だったが、口を開く前に声をかけられた。

「お疲れ様でした。主人が中でお待ちです」

恭しく頭を下げたのは、白いエプロンをつけた女性だった。
一騎はほっと胸を撫で下ろす。

「よかった…この世界には男ばっかなのかと…。でもお姉さんは師団の人には見えませんね？」

「いいえ。私は第1師団に所属する使用人です」

にこりと微笑む笑顔が眩しい。

「使用人も軍人扱いなのか…。そういえば第1師団は陛下の身の回りの世話も仕事だって言ってたな。
お姉さんが戦う職場に移される心配はない？」

不安そうに尋ねる一騎にフェンリィは面白そうに微笑む。一騎は改めて笑顔には種類がいくつもあるなと思った。

「ええ。世話係は専門職ですので。女性が入るのは世話係と外交ぐらいですね。
中には騎士になりたくて入る女性や、世話係をやる男性もいますが

…」

「ですよね～。こんな可憐な人に剣も血も似合いませんよ！そばで微笑んでくれるだけで…」

「ははっ、すげーしまりのない顔」

ニマニマとする一騎に、指さして笑うクラウド。二人を見てフェンリィは苦笑した。

「陛下をお待たせする訳にはいきません。一騎様？」

「あっ、ごめん、つい」

「では、陛下のお住まいにご案内致します」

そう言って大きな門をくぐった。
そこには第３師団の庭をこえる大きな庭園が広がっていた。兵舎と思われる建物も第３師団より大きい。
先頭を歩く女性は建物の脇を通っていく。
巨大な池を渡り、色とりどりの花が咲き乱れる道を歩き、ようやく白い建物の前についた。
第１、第３師団の兵舎は和風の造りになっていたが、陛下の住まいは西洋の城に近いものがあった。

「先にファレス様がお見えになっていますので、直接謁見の間にご案内します」

玄関をくぐると１０人ほどいる使用人達が頭を下げる。
一騎は初めての経験に落ち着かない様子だった。

広いホールを真っ直ぐ進み、階段を上がっていくと装飾の綺麗な扉があった。
タイミングをはかったように大きな扉が音をたてて開く。
扉を開いたのは赤を基調とした隊服に身を包んだ二人の兵士だ。
使用人の女性は扉の外で一礼した。

中は縦に長い造りになっていて、一番奥の椅子に座っているのが陛下だろう。回りには薄いベールのようなものがあり、高貴な者の姿を容易に確かめることができない。
それ以外にも目にはベールがかかり、髪は帽子と布で覆われている。
あれでは本人の確認はおろか表情さえも見えない。

一歩前を歩く二人の騎士は陛下に近づきすぎない場所で膝を折った。
慌てて一騎も挨拶のポーズを取ると頭上でクスクスと二つの笑い声が聞こえる。
一つは陛下で、一つは脇に侍るリリエルのものだ。
一騎がハッと顔を上げると困った顔をしたリリエルの紅い瞳と目があった。
数時間前に出会ったばかりで、ほんの３０分ほど前に別れたばかりだと言うのに酷く懐かしい気がした。

「遠い所にわざわざ足を運んでくれてありがとうございます。私はラーンと言います」

一騎が想像していた髭の威張った王様とはほど遠い、若くて優しそうな人だった。

ラーン陛下の声はどこかで聞いたことのある声だが、どこで聞いたのか見当がつかない。

「一騎様、道中危険なことはなかったですか？」

「はい、無事に」

「盗賊に襲われたりとかも？」

「ええ、何事もなく」

陛下は何か考えるように指を口にあてる。

「兆しが見えたと思ったのに、残念です…」

かろうじて聞こえたのは意味のわからない言葉で一騎は戸惑う。
救いを求めるように前の二人を見たが、何の反応もなかった。
逆らわないようにしているのかと思ったが、それにしては先ほどからポーズが変わっていない気がする。

グラリ。
二人の体がゆっくりと倒れる。
あっ。と声を出す間に強烈な目眩がした。
床に吸い寄せられるかのように体が傾いていく。
かろうじて見える床には青白いラインが浮かんでいた。

「次はもう少し頑張って下さいよ…」

遠のく意識の中で最後に聞いたのは、悲しそうに響く声だった。

◆

赤が広がる。

燃える燃える赤。

踊る踊る炎。

地上の赤を反射したような真っ赤な空。

あぁ、またこの夢か。

俺はいつも屍に囲まれてうつ伏せに倒れている。

そう、そしてそこにたたずむ一つの影がこちらにやってくる。

『やめろ…』

人影は何か言いたげに俺を見下ろす。

「やめっ…！！」

一騎の視界に飛び込んできたのは見慣れた白い壁だった。

ピピッという電子音のあとに聞き慣れた声が響く。

『おはようございます。昨日は…あまり眠れなかったようですね。心拍数上昇、呼吸が乱れています。…大丈夫ですか？』

システム管理をしている彼女たちは、対象の健康状態を把握することもできる。

「あ、あぁ。……夢を、見てた。悪夢を…」

一騎はゆっくりベッドから起き上がる。

『夢、ですか？』

「ハニーの夢なら最高だったんだけど」

『心拍数安定、呼吸正常。心配の必要性なし』

「ははっ、相変わらず手厳しいな。でもありがとう」

『なぜ、ありがとうなのです？』

システムの弱点といえるのは人間らしさがないことぐらいだろう。

「感謝してるから、嬉しかったから。こういうのは理屈じゃないの！」

『わかりませんが…了解しました』

曖昧な返事だったが、一騎は満足そうに笑った。

『如月一騎、あなたに新たな指令がきています。任務の内容は調査と観察。対象は座標４９９－０１０８－２８７２－３５６３。レベルＳの任務です』

「は？レベルＳ！？まともに任務完了したことのない下っ端の俺が？まさか！何かの間違いだろ？」

任務には６段階のレベルがあり、Ｅが簡単な任務で～Ａまである。Ｓは特殊任務扱いになる。
ちなみに一騎がこれまでにこなしたのはＣまでだ。

『いいえ、あなた宛てです。もうすぐ呼び出しもあるでしょう。レベルＳともなれば断ることも可能ですが？』

「レベルＳね…」

けたたましいコール音のあと部屋を後にする。お叱りの呼び出し以外は実に久々だなと一騎は思った。

◆

『目標設定。座標４９９－０１０８－２８７２－３５６３』

円形の装置が光を放つ。

『本当に……準備はよろしいですか？転送装置にお乗り下さい』

「いつでもＯＫだぜ？ハニー」

『……。声紋から如月一騎と断定。ＩＤ認証中……ゲート開きます』

円形の装置に乗った一騎は青白い光と共に消えた。

「行ったか」

転送システムのある部屋の２階に一つの影と二つの声が響く。

『はい。…でも、よかったのですか、指令？』

「彼が関わった惑星は滅亡する。なのに何故彼を送ったか…。今回ばかりは話が違う。彼が関わることによって何かしら変化があればいいのだ」

「……」

返答を考える様子に指令と呼ばれた男は苦笑する。

「むしろ何か起こらなくては困るのだよ。たとえ惑星が滅ぼうとも…」

to be continued…

Ｃｈａｐｔｅｒ２．陰謀は変動の予兆

回りの景色は次々と色を失っていく。
二人がいる謁見の間も例外ではなく、崩壊が始まっていた。

「へい…か」

青い髪の青年が陛下と呼んだ人物の前に歩いていく。その足取りは重く、今にも倒れそうだ。

「すまない、リリエル。力を使いすぎたようだね…」

リリエルと呼ばれた青年は陛下の前で崩れ落ちるようにしゃがみこんだ。
陛下はその頭にそっと触れる。リリエルは瞳を閉じ、ゆっくりと深呼吸を何度か繰り返した。
その間も世界は無に還っていく。

「また…失敗した」

「仕方ないよ。今回は干渉する時間が短かった。大丈夫、次こそはきっと…」

何もない空間に二人だけが取り残される。

「さぁ、少し眠るといい。これは悪い夢…次に目が覚めるときこそが現実」

◆

空間転移には慣れたとはいえ、異空間を移動する気持ち悪い感覚には慣れない。
自分が回っているのか世界が回っているのかもわからない。
そして気付いたら現地に立っているのだ。
地に足のつく感覚がして、一騎はゆっくりと瞳を開く。

「森…。ここから観察対象を探すのは難しいな。近い所からあたるか」

一騎は真っ直ぐと歩き出す。
つきあたりには身長の倍ぐらいありそうな大きな門があった。

「誤って敷地に入るのは不自然か…」

どうにか現地の人に会って地理の情報だけでも手に入れたかった。

門を見上げるようにして考えこんでいたせいで、周りの異変に気付くのが遅れた。
ガタリと音がした時にはすでに遅い。
空から人が降ってきた。
着地を成功させた人物は一騎に気付いていないかのように走り去る。
ヒラヒラとした布を纏い、華美な装束具をつけたその姿は――――。

「踊り子…？」

走り去る人物を振り返る。

「ちょっ、邪魔！」

どすっ。

一騎は鈍い音と共に前のめりに倒れた。
背中の衝撃のあとに地面に顎をぶつけた。

「うぅ…痛ってぇ」

「あ～あ、兄ちゃん大丈夫ー？」

「は、い。なんとか…」

「それにしてもあのバカ団長！自分の身分をわきまえて欲しいわ！
一人で街の方面に行くやなん、て…痛っ」

背中に乗っていた人物はぶつぶつと言いながら立ち上がろうとしたが、バランスを崩し地面に倒れた。

「捻った…」

「え！手当てしないと」

一騎は立ち上がり、踊り子を追ってきた人物を初めて見た。ふんわりとウェーブした黒髪に、タレ目と口元のほくろが印象的な人物だった。
服装は走り去った踊り子に近い。

「自分のことはええ。変わりにあの人追ったってや！」

「え…」

「はよぉ行き！」

「はいッ！…あ、でも俺地理わかんない」

「真っ直ぐ行ったらルビオールの街がある。あの格好で遠くまでは行っとらんはずやから…。頼むよ。あの人がおらんかったら困る」

「ここに連れてくればいいんですね？」

一騎はそう言って人影を追った。

「遠くまで来すぎたか…」

派手な衣装を身につけた青い髪の人物は、息を整えながら足元を見た。

室内を逃げ回り、庭に跳びだし、そのまま門まで越えてきた。靴を履く間などなかったし、そもそもこの衣装に似合う靴など持ち合わせてはいなかった。

ふと、背後に気配を感じ振り向いた。

品のない笑みを浮かべた連中に見覚えがあった。

騎士団の治安維持部隊に対立する組織のメンバーだ。それぞれ象徴である“剣に巻き付いた蛇”の入れ墨がある。

厄介なことになった。

彼らは他の集団と比べ巨大で恐れを知らない。騎士の名を出して怯む相手ではない。

それにこの格好を見せたくなかった。
普段から髪は長めだが、つけ毛のせいか頭頂部で結んだ髪が肩まであり、舞台用にうっすらとメイクまでしてある。

仕方ない、力付くで…と腰の剣に手をのばしたが、騎士団の制服ではないため帯刀はしていない。
その上、人目を忍んだことが災いした。目の前には敵、背後は行き止まりだ。
厄介なことになった。
体術は得意な方ではなかったが、やむを得ないなと思い、構えた。
その瞬間悲鳴が聞こえた。

「あー！やっと見つけた」

この国では珍しい革のジャケットを羽織った声の主は、蛇の入れ墨の男達をバッタバッタと薙ぎ払っていた。

「あんたは…？」

「俺は如月一騎。あなたを追っかけてた人が怪我しちゃって、代理を頼まれました！」

そうやって言葉を交わす頃には蛇の入れ墨の男達は逃げていった。

「ふーん、あんた門の近くにいた人か」

「ていうか、男…？」

一騎は踊り子衣装の人物の顔を近くでまじまじと見た。
今まであまり表情を崩さなかったが、さすがに不愉快だったらしい。
「…っ、好きでこんな格好してるわけじゃない」
「ほんとだ、よく見ると女の子じゃないや。なんで団長さんなのに踊り子？」
「それは…陛下の誕生祝いに舞いを踊ることになったんだ。衣装合わせの時に仕上がりが見たいからモデルになってほしいと頼まれて…。結局はめられたんだよ。この衣装は最初から俺に用意されたやつだった」
「それが嫌だから逃げた？」
「当たり前だ」
「でもその人は衣装の専門家なんでしょ？舞いに、何よりあなたに似合ってるから見立てたんだと思う。そう思わない？団長さん」
踊り子衣装の人物は納得できないという表情をした。そしてため息を一つついた。
「忘れてた。あいつの仕事の腕は確かだ。いつも趣味で無理矢理着せられるから」
仕方ない、と一言漏らして真っ直ぐ一騎に向き直った。
「如月一騎と言ったな？今回はあんたに従ってやる。

私は第3師団団長リリエル・ブライト・ファレスだ」
右手を差し出し、一騎と軽く握手をする。
一騎が引っ込めようとした腕をリリエルは掴んだ。
「ところで…この国では資格のない者が帯刀することは禁止されているんだが？」
ニヤリと擬音がつきそうな笑顔を貼り付け、それはそれは楽しそうな声色でリリエルは言う。
「一緒に来てもらおうか？」

◆

「エミー」
『…はい、司令』
「如月一騎の様子は？」
勲章がついた白い制服に身を包んだ男は、惑星の映るモニターを見つめ呟いた。
『目的地付近に到着、現地人との接触を確認。今のところ計画通り

です』

無機質な女性の声はどこからともなく聞こえる。

「そうか。あとは如月一騎の行動次第だな。愛、友情、悲しみ、憎悪、なんでも深く心に残せればいい。そうすればこの忌ま忌ましい繰り返しに嫌でも気付くはず…」

ククク…と静かな男の笑い声が室内に響くだけだった。

◆

ルビオールの街は一騎にとってかなり新鮮だった。建物はどれも同じ高さで、高層ビルと呼べるような高い建物がない。店は殆どが露店で、とても賑やかだった。

一騎が住んでいたのは高層ビル群が建ち並び、空には乗り物が飛び交うような街で、店は殆どが建物の中にあった。世界を回ればこういった町並みを見ることができたのだが、一騎は空を目指していた。宇宙にでるために軍の士官学校に入り、そして今任務を遂行中なのである。

街を出るまでの間キョロキョロと興味深げに辺りを見ていた。食材も見たことがないものばかりで、自由になったら食べに来ようと思った。

逮捕された身でありながら一騎に危機感がないのは、前を歩くリリエルのせいでもある。彼は一騎に背を見せて足早に歩いている。

逃げると思わないんだろうか？後ろからバッサリなんてこともあるかもしれないのに。
一騎に端から逃げる気はないが、何故か心配になる。

あれこれ考えるうちに森に出ていた。木々を見てもつまらなかったので、一騎は前を歩く自分より少し背の低い人物の揺れる青い髪をなんとなく見つめた。
暗い路地では気づかなかったが、日の光りを浴びた青い髪はキラキラと輝いて美しかった。

「…この国は初めてか？」

リリエルは振り返らずに言った。

「え、なんで？」

「ルビオールの街を不思議そうに見てたし、初めて訪れるならこの国の法を知らなくても頷ける」

本人が気づいてないだけでリリエルは一騎の様子を伺っていたらしい。

「すごい、後ろに目でもあるのか！？」

そんなわけあるか！とリリエルは立ち止まり振り返った。

「あんたが鈍感なんだよ」

キッと睨みつけると一騎はガシッとリリエルの肩を掴み近づいた。

「すげぇ…宝石みてぇに真っ赤！」

「！？」

「髪は青いし、目は太陽みたいに赤いし、リリエルって空みたいに綺麗な色してるな～」

「ば、…かだろ…あんた」

よく考えてみるとリリエルとまともに目が合うのは初めてだと思った。
自己紹介のときでさえチラッと合ったような気がするだけで、握っていた手を見ていた気がした。
今だって赤くなった頬が見えるだけで、目を逸らされている。

「いやー、ほんと初めて見た」

「…あんただけだ、そんな馬鹿みたいなこと言うの。気をつけたほうがいい、この世界では紅は悪魔の色。それを生まれながら宿してる…意味わかるだろ？」

今にも崩れ落ちそうなほど辛そうなリリエルを見て、一騎はそれ以来口を開かなかった。

最初に訪れた門の前には誰もいなかった。
追い掛けていた人物がいれば、リリエルと再会しているどさくさに紛れて逃げることも可能だったのに…と一騎は思った。

二人は大きな門をくぐり、庭園を歩いた。少し行くと両脇に建物がある。リリエルは右の少し大きめの建物に向かって歩いた。

中に入ると兵士がいた。一騎達を一瞥したがすぐに自分の仕事に戻る。

中にはリリエルを女性と思う者もいたようだが、別の兵士に注意される。あの瞳を見ろと。

一騎からは表情は見えないが、リリエルは気にしてる風ではなく変わらず一歩前を歩いている。

一騎は先程の言葉が気にかかった。この風景がいつものことだと言うんだろうか？

一騎は思わず名前を呼んだが、第三者に消されてしまった。

「リリィちゃーーーん！！」

猛スピードで走ってきた人物はリリエルに飛びついた。

ふんわりとウェーブした黒髪に、タレ目と口元のほくろが印象的な人物…リリエルを追いかけていた人物だった。

「やっぱ戻ってきてくれたんやねー。君中々やるやん！」

「もう逃げないから離れろ、ナオ」

「で、なんでこの人まで連れてきたん？」

「無免許での剣所持」

「今日は騎士団長ってわけやないのに、逮捕してくるとか仕事熱心やねー」

一騎は二人の会話が終わるまで待つつもりだった。しかし、気になる言葉がいくつかあった。

「あの…騎士とか逮捕とかなんか物騒な話だけど、二人はサーカス団じゃないのか？」

「はははッ、ナニソレ！？リリィちゃん一体どんな説明の仕方したん？君もそんなんでよぉー着いてきたねえ？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6664i/

LOOP

2011年1月16日02時28分発行